— やさしく　かしこく　つよく —　第 595 号

柿小だより

令和３年３月　柿崎小学校発行

「マスクの壁を越えて」

近藤　隆司

コロナ禍の中、マスク生活やマスク授業がすっかり定着してきました。

マスクをしていることで、意識して行うようになったことがいくつかあります。相手に自分の意思を伝える（理解してもらう）ために、大きめの声でゆっくりと話すこと。相手にしっかりと視線をおくること。伝えようとする意識をもつこと。

一方、年度当初から、授業や活動について心配がありました。マスク越しの教師の声（指示、指導、熱意・・・）は、子ども（の耳、の心・・・）に届いているの（届くの）だろうか。目と耳から教師の声を見て聴きて判断している子どもは、教師の口元や表情が見えないことで聴こうとする意識や意欲が無意識に低下し、それに伴い学習意欲も低下するのではないか。「一枚の薄い『壁』の影響」による心配が、私の中で高まってきました。

10 月中旬ころだったと思います。空箱を使った工作をしている 1 年生の教室で、動物を作っている女児に、「大きなワニができたね」と話しかけました。女児からは「何を言っているのか、聞こえない！」と返されたので、耳元に近づいて再度伝えたところ、女児は満足したようにうなずきました。

女児は、私の声をしっかりと聴いていて、理解しよう応えようとしていることを、実感することができました。なんとなく聞いて（聞き流して）いて、なんとなく私にあいづちをうつのではなく、私の問いかけをしっかりと聴いて、それに応えてくれた女児の姿に感動しました。あたりまえのようですが、聴きたいことや知りたいことは、しっかりと聴きたいし応えたいということを、再認識することができました。

「目は口ほどにものを言う」と言うけれど、口（言葉）はやっぱりものを言うのです。

では、子どもに聴いてもらうために、私たちはどのようにすればよいのでしょうか。それは、伝えたい内容の言葉を選び、しっかりと相手を見て、「生きた言葉」で語りかけることに尽きると思います。

子どもに届く言葉、子どもの心に響く言葉で、「マスクの壁」を越える教育活動を日々確実に実践してまいります。

本年度、保護者の皆様や地域の皆様から、当校の教育活動に対しまして多くの御協力・御支援いただきありがとうございました。来年度も、子どもたち、保護者の皆様、地域の皆様、教職員一同力を合わせて、よりよい柿崎小学校をつくってまいりましょう。

異学年の子ども同士の関わりを深めて

～海っ子大縄大会の取組～

２月１０日（水）海っ子大縄大会を実施しました。この活動は、異学年集団の海っ子班で協力し、大縄を回し２分間で何回跳べるかを競う活動です。大縄が得意な子も、苦手な子も一緒になって跳びます。回し手が、１年生でも跳びやすいようにゆっくり回したり、高学年が苦手な子にタイミングよく背中を押してあげたりして、思いやりと助け合いの態度を育てる大切な活動です。事前の「海っ子班会議」では、ルールを確認したり、めあてを立てたりしました。６年生が、下学年に「新しい縄は、当たっても痛くないよ」など優しく声がけをしました。海っ子班での練習は、本番までに５回設定しました。どの班も跳んだ回数を増やしていきました。

大会当日、海っ子班を青組と白組の２つに分け対抗戦では、白組３９９回、青組３８８回で、今年度は白組が勝利しました。また、班ごとの対抗戦でも大接戦となり、青Ｃチームが１００回で優勝しました。

最後に、班ごとに、頑張ったことや反省を一人一人が発表し、メンバーから褒めてもらったり、拍手をもらったりして連帯感や達成感を味わうとともに温かい雰囲気がつくられた中で終わることができました。

練習後に、回数を保健室前掲示板に書きます。他の班の回数がとても気になります。

大会本番。密集を避けるため、会場を体育館と、１階から３階の広場で行いました。練習の成果を発揮し、心を一つに跳びました！

優勝した青Ｃチーム。みんな最高の笑顔です。

２月１６日に、海っ子班のメンバーに、メッセージカードを送りました。みんなのよさを伝え合い、握手をしました。